

むぎ の
麦野 C 遺跡 5

— 麦野C遺跡第12次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第970集



2008年
福岡市教育委員会

序

いにしえの昔から大陸文化の窓口として栄えた福岡市は、21世紀の今日も更なる発展を目指してさかんに都市開発が推し進められています。それに伴ってやむなく失われる埋蔵文化財については、将来にわたって記録を保存するための発掘調査をおこなっています。

本書は、藤延夫氏による共同住宅の建設に先立って実施した麦野C遺跡第12次調査の発掘調査報告書です。

今回の発掘調査では、弥生時代と近世の集落跡が発見されました。なかでも近世の井戸跡は井側をもたない素掘りのもので、この時代としては稀な構造をしていました。これは中世から近世の井戸の変遷や構造を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民のみなさんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間には、藤延夫氏をはじめ多くの方々のご指導とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

れいがん

1. 本書は、福岡市教育委員会が共同住宅の建設に先立って、2007（平成19）年11月1日～11月20日までに福岡市博多区麦野6丁目15-3で緊急発掘調査した麦野C遺跡第12次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位である。
3. 道構は、貯蔵穴をSU、井戸跡をSE、土壤をSK、溝道構をSD、ピットはSPと記号化して呼称し、その後にすべての道構を01から通番してNo.を付した。
4. 本書に掲載した道構の実測は小林義彦が、遺物の実測は小林と今村ひろ子が作成した。
5. 本書に掲載した道構と遺物の製図は、小林と今村が作成した。
6. 本書に掲載した道構と遺物の写真は小林が撮影した。調査区の全景写真是、各区の全景写真をCG合成した。
7. 本書の執筆・編集は小林が行った。
8. 本書に係わる遺物・記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序	
I. はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 立地と歴史的環境	3
II. 調査の記録	4
1. 調査の概要	4
2. 貯蔵穴	6
3. 土 壤	6
4. 井戸跡	9
5. 溝遺構	10
6. その他の遺構と遺物	11
III. おわりに	13

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2	麦野C 遺跡位置図 (1/10,000)	3
Fig. 3	麦野C 遺跡第12次調査区位置図 (1/1,000)	4
Fig. 4	遺構配置図 (1/150)	5
Fig. 5	調査区全景 (東より：C G合成)	5
Fig. 6	2号貯蔵穴実測図 (1/30)	6
Fig. 7	2号貯蔵穴 (南より)	7
Fig. 8	3号土壤実測図 (1/30)	7
Fig. 9	3号土壤 (北より)	7
Fig. 10	5・6号土壤実測図 (1/40)	8
Fig. 11	5・6号土壤 (南より)	8
Fig. 12	11号土壤実測図 (1/30)	8
Fig. 13	11号土壤 (東より)	9
Fig. 14	3・11号土壤出土遺物実測図 (1/3)	9
Fig. 15	15号土壤実測図 (1/30)	9
Fig. 16	41号土壤実測図 (1/20)	10
Fig. 17	41号土壤 (南より)	10
Fig. 18	41号土壤出土遺物実測図 (1/4)	10
Fig. 19	49号土壤実測図 (1/20)	11
Fig. 20	49号土壤 (西より)	11
Fig. 21	10号井戸跡実測図 (1/30)	12
Fig. 22	10号井戸跡 (東より)	12
Fig. 23	10号井戸跡下層竹枝出土状況 (北より)	12
Fig. 24	10号井戸跡土層断面 (南より)	12
Fig. 25	10号井戸跡出土遺物実測図 (1/4)	13
Fig. 26	1号溝土層断面実測図 (1/20)	13
Fig. 27	1号溝 (北より)	13
Fig. 28	1号溝出土遺物実測図 (1/3)	13
Fig. 29	4号ピット遺物出土状況 (西より)	13
Fig. 30	9号ピット遺物出土状況 (西より)	13
Fig. 31	17号ピット遺物出土状況 (東より)	13
Fig. 32	ピット出土遺物実測図 (1/3)	14
Fig. 33	出土遺物 (縮尺不同)	14

I. はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

麦野C遺跡の立地する麦野台地は、春日市と境を接する福岡市の南東端にあり、のどかな田園風景が広がる農村地帯であった。明治22(1889)年、この地に九州鉄道の雑駅限駅が、また大正13(1924)年には西日本鉄道の雑駅限駅も開設されて市街化が始まる。この恵まれた交通の利便性によって一帯の田畠は次第に住宅地と化し、一層の市街化が進んだ。ところが、近年は社会環境の変化による市街地の再開発が急速に進み、次第に低中層の共同住宅へと建て替わりつつある。

西鉄雑駅限駅に近い麦野6丁目はその傾向が最も顕著で、2~5・6階建ての共同住宅が建ち並んでいる。藤延夫氏は、麦野6丁目15番地3号に共同住宅の建設を計画され、その地における埋蔵文化財有無の照会が平成19(2007)年7月11日に埋蔵文化財第1課事前審査係に提出された。

申請地が所在するJR南福岡駅から西鉄雑駅限駅を中心とする麦野台地は、南八幡遺跡や麦野A・B・C遺跡として周知化された埋蔵文化財包蔵地内にあり、周辺地での発掘調査例から奈良時代を中心とする集落域が広がっていることが予想された。そこで、2007(平成19)年9月13日に原因者立会のもとで確認調査を実施した。その結果、70~90cmの厚い客土層の下から土壤と柱穴が検出され、古代の集落域が広がっていることが確認された。遺跡は現状での保存が望ましいが、建物の設計構造上これ以上の盛り土はできず、建築計画案は設計変更不可能なものであった。そこで、福岡市教育委員会埋蔵文化財課では発掘調査によって記録保存を図ることとした。共同住宅は、竣工期が決められて建築着工の時間が迫っていることから、早急な調査の着手が望まれるために発掘調査は2007(平成19)年11月1日よりはじめ、11月20日に無事終了した。発掘調査は、厚い客土層の排土置き場の確保に難渋し、予測に反して3分割しての調査を強いられた。しかし、この間は天候にも恵まれ、作業に従事した方々の協力もあって予定より早く終了することができた。なお、発掘調査は、事業の性格上原因者負担による民間受託事業と国庫補助事業とで実施した。

2. 発掘調査の組織

調査委託 藤 延夫

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財第1課

文化 財 部 長 矢野三津夫

埋 蔵 文 化 財 第 1 課 長 山口譲治

埋 蔵 文 化 財 第 1 課 調査係長 米倉秀紀

調査庶務 文 化 財 管 理 課 榎本芳治(課長) 鈴木由喜(担当)

調査担当 埋 蔵 文 化 財 第 1 課 小林義彦

調査・整理作業

石橋陽子 伊藤美伸 今村ひろ子 大瀬良清子 坂梨美紀 知花繁代 塚本よし子

土斐崎孝子 西田文子 馬場イツ子 濱フミコ 播磨博子 福田 操 松尾千寿

松下さゆり 三栗野明美 森田祐子 矢川みどり 山口慶子

発掘調査にあたっては、地権者の藤延夫氏や照栄建設などの関係者諸氏にご協力とご配慮をいただいた。協力とご理解に深く感謝申し上げます。



Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

3. 立地と歴史的環境

麦野C遺跡は、古くから雑飼と呼称される雑飼隈にあり、位置的には大野城市と春日市に挟まれた福岡市のもっとも南端に位置する。地形的には、福岡平野を貫流する御笠川と那珂川との間にある春日丘陵の東辺に並行してのびる丘陵上に立地している。春日丘陵には、奴国王墓とされる須玖岡本遺跡があり、その周縁には青銅器製造工房跡の須玖永田遺跡や須玖五反田遺跡が展開している。雑飼隈丘陵は、春日丘陵から北東へ1kmの距離にある。この丘陵は鳥柄ローム層を基盤層とし、諸岡川などの解析による谷が幾筋も湾入していくかの小さな低丘陵を形成している。この雑飼隈の低丘陵上に点在する遺跡を地形的に区分して、北から麦野A遺跡、麦野B遺跡、麦野C遺跡、南八幡遺跡、雑飼隈遺跡と呼んでいる。

麦野C遺跡のある雑飼隈の丘陵上でもっとも古い遺物は、旧石器時代の石刃や剥片がある。麦野A遺跡1次調査区、麦野B遺跡3次調査区、雑飼隈遺跡の5次調査区や10次調査区で出土しており、台地上の広い範囲にわたって拡がっていることが明らかになりつつある。

次に、縄文時代の遺構は稀薄である。麦野B遺跡の3次調査区や南八幡遺跡の6次調査区、7次調査区で「落とし穴」と推察される土壙が検出されているが、出土遺物が少なく時期を明確にするには至っていない。麦野C遺跡3次調査区では該期の石器が出土しているが、晚期の刻目突帶文期にいたるまで明確な遺構や遺物は少ない。

弥生時代になると、遺構は次第に拡がりを見せる。前期は南端の雑飼隈遺跡5次調査区で、円形住居跡と貯蔵穴からなる集落跡が検出され、大規模な中心的集落のあった可能性が想起される。また、麦野A遺跡第18・19次調査区でも貯蔵穴群が検出されており、丘陵の北部域にも拡がっている。中期は、麦野C遺跡で方形の住居跡が検出されている。後期には、雑飼隈遺跡5次調査区や南八幡遺跡5次調査区で方形の住居跡が散見されるだけのやや稀薄な拡がりを示すが、南八幡遺跡9次調査区ではガラス小玉を伴う住居跡や掘立柱建物跡がまとまって検出されている。雑飼隈丘陵では、南縁の三つの小丘陵上で比較的小規模な集落が点的に営まれたものと推考される。一方、墳墓は麦野C遺跡5次調査区で小児壇棺墓1基があるのみで集落域に伴う墳墓群は明確ではない。

古墳時代になると、遺構はまた稀薄になる。殊に、前期から中期の遺構や遺物はほとんどなくなる。後期には、南八幡遺跡2次調査区と3次調査区で住居跡が検出されており、一定の集落域を構成して展開していたものと推測されるが、奈良時代の大規模な集落跡との関連については明らかではない。



Fig. 2 麦野C遺跡位置図 (1/10,000)

つづいて奈良時代になると、掘立柱建物群を伴う大規模な集落域が出現する。7世紀末から8世紀はじめには、雑餉隈遺跡9次調査区で方形に配置された大型の建物群が出現する。その規模と配置は官衙的な性格を想起させるものがある。さらに、8世紀前半から後半に至ると集落域は、丘陵の全域にわたって展開する。南端の雑餉隈遺跡では、5次調査区で50棟を越す住居跡が検出されている。また、東側の麦野C遺跡では隣接する1次調査区と5次調査区には70棟にのぼる住居跡がある。住居跡は、数回に亘っての建て替えがなされ、長期的に集落が展開していたことが推測される。西側の南八幡遺跡でも台地南縁の2次・3次・6次・8次・9次調査区を中心に集落域が展開しており、小さな丘陵ごとに多少の規模的な差異を有しながらも集落域が展開している。殊に、雑餉隈遺跡や麦野C遺跡はその傾向が顕著で、雑餉隈丘陵における拠点集落的な様相を想起させる。あたかも「雑餉隈」の名が、太宰府官人の雑餉の居住地とか食糧倉庫が建ち並んだ所とする古説に符合するようである。

なお、平安時代のはじめになると集落群は急速に縮小する。麦野A遺跡の3次調査で井戸跡が検出されているほかに柱穴から遺物が散見され、掘建柱建物跡の存在が想起される。

II. 調査の記録

1. 調査の概要

麦野C遺跡は、御笠川の西岸を南北にのびる雑餉隈の丘陵上にある。この雑餉隈丘陵は、挿入する開析谷によって五つの低丘陵に分かれ、その丘陵上には南から雑餉隈、南八幡、麦野C、麦野B、麦野Aの遺跡が縦列的に占地している。麦野C遺跡は、この雑餉隈丘陵の東部に位置する東西400m、南北が800mほどの遺跡で、西縁には麦野A遺跡と麦野B遺跡が、南縁には南八幡遺跡が開析谷を隔て対峙し、東には沖積地が抜がっている。第12次調査区は、この麦野C遺跡北西部の丘陵が北端の突出部にむかって砂州状にのびる丘陵の鞍部に立地し、西側は麦野A遺跡を隔てる開析谷へむかって緩やかに傾斜していく。麦野C遺跡では、これまでに11地点で発掘調査が実施され、周辺には8世紀代の集落域が比較的広範囲に抜がっていることが確認されている。

発掘調査は、平成19(2007)年11月1日の表土層の除去作業から開始した。排土は、場内に仮置きして埋め戻すことを前提にして二分割の予定で調査に臨んだ。しかし、厚い客土層が災いして結果的に非効率的な三分割による調査となり、ハードな日程を強いられたが、関係



Fig. 3 麦野C遺跡第12次調査区位置図 (1/1,000)

者諸氏の協力で予定より早い11月20日に無事終了した。改めて発掘調査に従事された人々の労苦に感謝します。

発掘調査の結果、貯蔵穴と井戸跡、土壤、溝のほかに柱穴などの遺構を検出した。時期的には、弥生時代と中世後半～近世の2時期に大別され、貯蔵穴が弥生時代で、井戸跡や土壤、溝などは中世後半～近世に比定される。このうち弥生時代前期と考えられる貯蔵穴は、調査区の西隅で1基が単独で検出されたが、本来的には丘陵の鞍部に沿って複数基で分布しているものと考えられる。一方、中世後半～近世の遺構のうち、井戸跡や土壤、溝を除いた柱穴等は極めて浅い。埋甕土壤の壺が底部を残して削平されていることから調査区周辺は、近世以降に大きく開削され、その排土は麦野A・B遺跡を画する開析谷を埋め立てて耕地化されたものと推考される。また、柱穴の中には、柱痕を残すものもあるが、ひとつの建物跡としてはまとめえなかった。

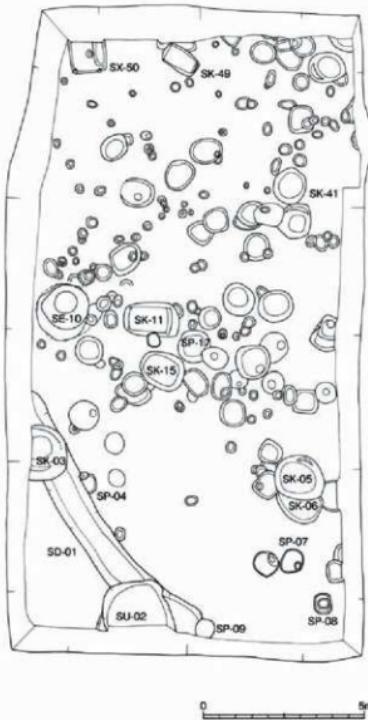


Fig. 4 遺構配置図 (1/150)



Fig. 5 調査区全景 (東より: CG 合成)

2. 貯蔵穴 (SU)

貯蔵穴は、調査区の西端で1基を検出した。麦野C遺跡では希少な検出例で、本来的には丘陵の鞍部から南に抜ける尾根上に中心域には比較的まとまって分布していることも考えられるが、その抜がりは散逸的な分布が想起される。これに対して、北の開析谷を隔てた麦野A遺跡では、弥生時代前期後半の貯蔵穴群が、幾つかのまとまった群を構成して分布していることが確認されており、麦野C遺跡と好対照な在り様を示している。

2号貯蔵穴 SU-02 (Fig. 6・7)

2号貯蔵穴は、調査区の北西隅にあり、東壁は一部を残して1号溝によって大きく削平されている。平面形は、短軸が210cm、長軸が250cmの楕円形プランをなし、N-15°-Eに主軸方位をとる。床面は、ほぼ平坦であるが中央部は浅く凹レンズ状に凹み、壙央は比較的固く踏み締められている。壁面は、床面より35cmほどの高さまで外方に向かって10-20cmほどフラスコ状に開いた後に、小さく屈曲して内傾しながら入り口に向かって窄まるいわゆる袋状の断面形をなしている。壁高は現況で90cmを測るが、台地の削平状況を勘案すると本来的には2mほどの深さがあったと推考される。覆土は、上-中層に明褐色粘土粒と小プロックが混入した灰黒色土層と黒色土層が互層をなし、その最下層に明褐色粘土プロック層が厚く堆積していた。この厚い粘土プロック層の堆積は、比較的早い時点での天井壁の崩落を窺わせる。遺物の出土はほとんどなく、明確な時期は明らかでないが、前期後葉から中期初めと推測されよう。

3. 土 壤 (SK)

土壤は、すべてで7基を検出した。プラン的には円形と長方形のものに大別され、長方形プランのものは比較的深く掘り込まれ、機能的には墳墓的な傾向が窺える。これに対して円形プランのものは浅く、その機能も明らかでない。また、分布的には、散逸的ではあるが、狭小な調査区の中央部に比較的まとまる傾向があるが、それが時期的あるいは形態的な差異によって生じるものか否かは明らかにし難い。

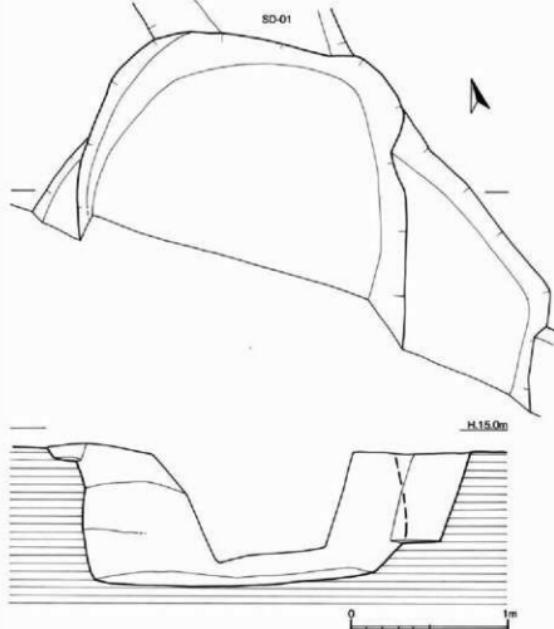


Fig. 6 2号貯蔵穴実測図 (1/30)

3号土壤 SK-03

(Fig. 8・9・14)

3号土壤は、調査区の南西部に位置し、弧状にのびる1号溝の北端を削平して掘り込んでいる。平面形は、直径が170cmほどの円形プランで、南壁の中位には細い半月形のフラット面が浅く掘り込まれている。壁面は緩やかに立ち上がり、壙底は浅い凹レンズ状をなしている。覆土は、壙央の暗茶褐色土を中心にして炭片と灰の混在層が壙面に沿ってドーナツ状に堆積していた。遺物は陶磁器の壺や皿のほかに砥石片が出土した。

1は、口径が15.2cmの波佐見窯系の染付磁器皿である。丸く収めた口縁部は肥厚し、直口する体部は外面に唐草文、内面には窓絵に草花文を描く。17世紀後半の產。2は、短頸の陶器壺で口径は23.4cmを測る。口縁部は短く直口し、偏球形をなす体部には2条の横凹線が巡っている。茶褐色の胎土には白や黒色砂が混入し、内面には異物が付着している。3は、砂岩質の砥石で、煤が付着している。

5号土壤 SK-05 (Fig.10・11)

5号土壤は、調査区の南隅に位置し、南西壁は6号土壤の東壁を削平して掘り込んでいる。平面形は、直径が135～145cmの円形プランをなす。

やや緩やかに立ち上がる壁面は、深さが25cmで壙底は浅い凹レンズ状をなす。

6号土壤 SK-06

(Fig.10・11)

6号土壤は、調査区の南隅に位置する短径が120cm、長径が150cmほどになる橢円形プランの土壤で、東壁は5号土壤に削平されている。壁高は15cmほどで、ややフラットな壙底は壙央が浅く凹んでいる。



Fig. 7 2号貯蔵穴 (南より)

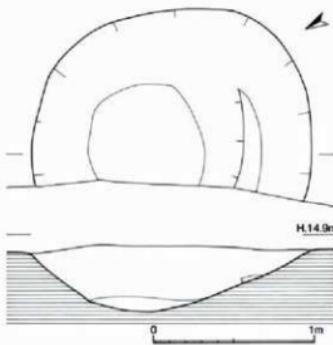


Fig. 8 3号土壤実測図 (1/30)



Fig. 9 3号土壤 (北より)

11号土壤 SK-11 (Fig.12・13・14)

11号土壤は、調査区の中央部に位置し、すぐ南には15号土壤がある。平面形は、短軸が104cm、長軸が173cmの隅丸長方形プランを呈し、主軸方位をN-52°-Wにとる。壙底はほぼフラットで、廣央がわずかに凹む。急峻に立ち上がる壁面は深さが45cmで、西小口壁の両端には側壁側からの抉入痕がある。また、東小口壁際から顎骨片と推測される骨片が検出され木棺墓の可能性が想起される。覆土は、茶～暗茶褐色土の單一層で、陶器蓋が出土した。

4は、ミニチュアの陶器蓋で、口径は26cm、器高は1.3cmである。菊と紗綾形の文様を描いた天井部には小さな摘みが付く。

15号土壤 SK-15 (Fig.15)

15号土壤は、調査区のはば中央部に位置する楕円形プランの土壤で、すぐ北には11号土壤がある。平面形は短径が112cm、長径が142cmで、壁高は20cmである。壁面はやや緩やかに立ち上がり、壙底は浅い凹レンズ状をなす。覆土は砂粒を含んだ暗灰～暗茶褐色土で遺物は1点も出土しなかった。

41号土壤 SK-41 (Fig.16・17・18)

41号土壤は、調査区の北東隅部に位置する埋甕土壤である。土壤の平面形は、直径が100～112cmの円形プランをなし、その壙央に瓦質のバンドウ甕を水平に埋置しているが、削平が著しく甕は底部を残してほとんどが消失している。壙底はフラットで、甕下には敷きつめて埋置甕の安定を図っている。

5は、瓦質の長胴甕で、平底をした甕の底径は35cmである。内面はハケ目調整。胎土には小～粗砂粒を多く含み、焼成は良好。外面は灰黒色、内面は明黄橙色である。

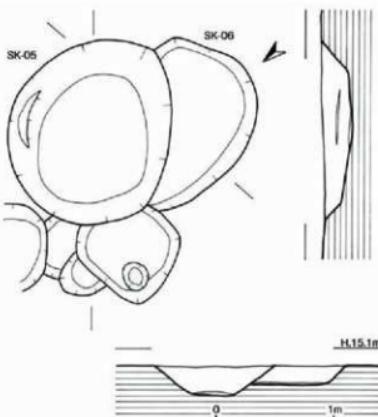


Fig.10 5・6号土壤実測図 (1/40)



Fig.11 5・6号土壤 (南より)

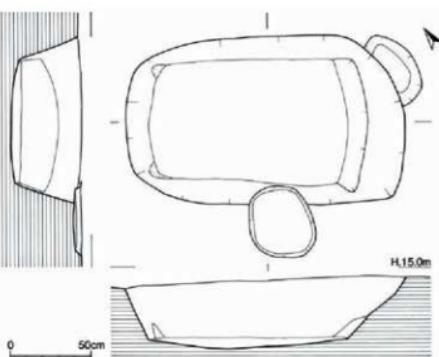


Fig.12 11号土壤実測図 (1/30)

49号土壤 SK-49

(Fig.19・20)

49号土壤は、調査区の北壁際に位置する。平面形は、短軸が70cm、長軸が118cmの長方形プランを呈し、N-Wに主軸方位をとる。壁高が87cmと深い壁面は急峻に立ち上がり、壌底は浅い凹レンズ状をなしている。小口壁の両端には、側壁側から小口壁に向かって板材を挿入したような浅い溝状の抉入痕があり、組合せ式の木棺墓の可能性が想起される。また、南小口壁には底面より10cmほど上の上がった位置に狭い小さなフラット面を造っている。覆土は黒色土の単一層で、遺物は1点も出土しなかつた。

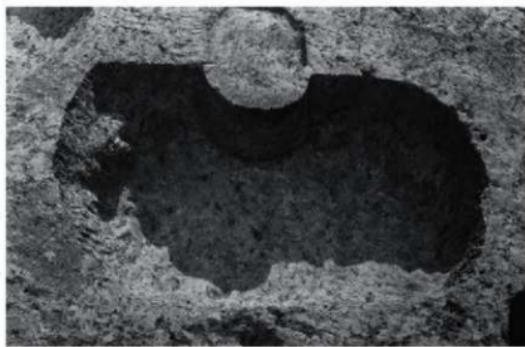


Fig.13 11号土壤 (東より)

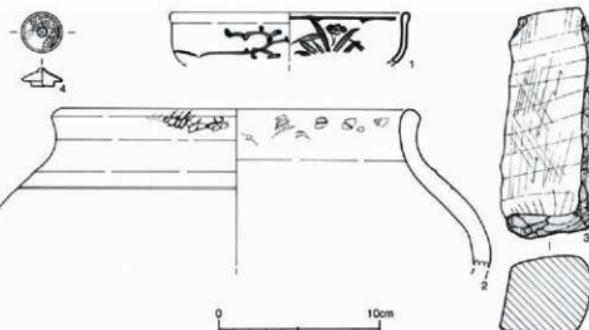


Fig.14 3・11号土壤出土遺物実測図 (1/3)

4. 井戸跡 (SE)

井戸跡は、1基を検出した。占地的には丘陵が東から勢いよく開析谷に向かって緩やかに傾斜していく丘陵鞍部の北側に拡がる緩斜面上に立地している。しかし、狭小な調査区内で单基で検出したために分布的な拡がりは明らかでないが、状況的には幾基かの井戸がまとまって分布するような傾向は窺いがたい。

10号井戸跡 SE-10 (Fig.21～25)

10号井戸跡は、調査区西壁際の中央部に位置する素掘りの井戸で、南東へ1mの距離には11号土壤がある。平面形は短径が155cm、長径が180cmの楕円形プランをなす。

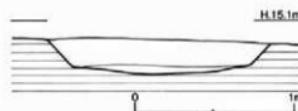
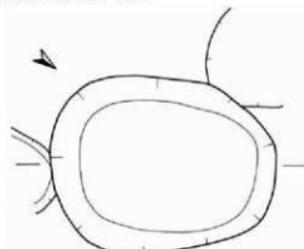


Fig.15 15号土壤実測図 (1/30)

壁面は、上半部が小さく袋状に膨らみ、下半部はほぼ垂直に窄まる。底面は、平坦で直径が70cmほどの円形をなし、桶等の井側は設置されていない。井戸底の標高は、1208mで削平を勘案すると本来は4mほどが掘り込まれていたものと推考される。底面には葉の付いた竹幹や枝が乱雑に投棄されており、その下から瓦質の擂鉢や土鍋のほかに石臼片が出土した。覆土は、粘質を帯びた黒色土の單一層である。

6は、口径が31.2cmの瓦質の擂鉢である。体部はストレートに外反し、肥厚した口縁部は端部を水平に整形している。調整は外面が指頭押圧後に縦ハケ目、内面は横ハケ目後に4本で1単位をなす擂目を入れている。7は、口径が49.4cmの土鍋である。体部はストレートに外反し、外面には煤が厚く付着している。調整は内外面ともに指頭押圧後に粗い横ハケ目で、外面は粘土織ぎ目の凹凸が著しい。焼成は良好。8は、砂岩質の石臼で、破碎後の被熱による赤変がある。

5. 溝遺構 (SD)

溝遺構は、弧状に膨らんで西へ屈曲する短い溝1条を検出したが、集落域との繋がりや用途は明らかにしがたい。

1号溝 SD-01

(Fig.26～28)

1号溝は、調査区の南西隅にある溝で、北端部は3号土壤によって削平されるが、南端部は2号貯蔵穴の東半部を削平して開削されている。溝は、西に小さく張り出すように弧を描いて磁北

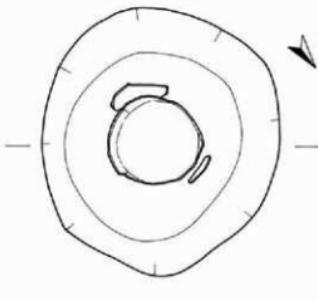


Fig.16 41号土壤実測図 (1/20)



Fig.17 41号土壤 (南より)

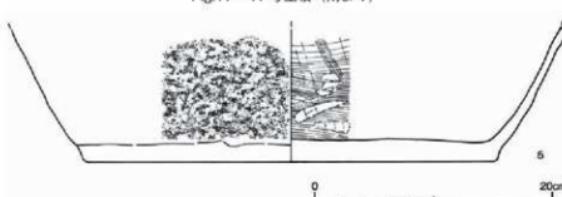


Fig.18 41号土壤出土遺物実測図 (1/4)

方向に沿って延び、その両端部は西側にむかって矩形に曲がっている。溝幅は、100~110cm、深さは75cm、底幅は45cmで、断面形は逆台形をなしている。覆土は、褐色土~褐灰色土で、中位には明黄色粘土ブロックを含んだ褐色土が両側から流れ込んでいる。

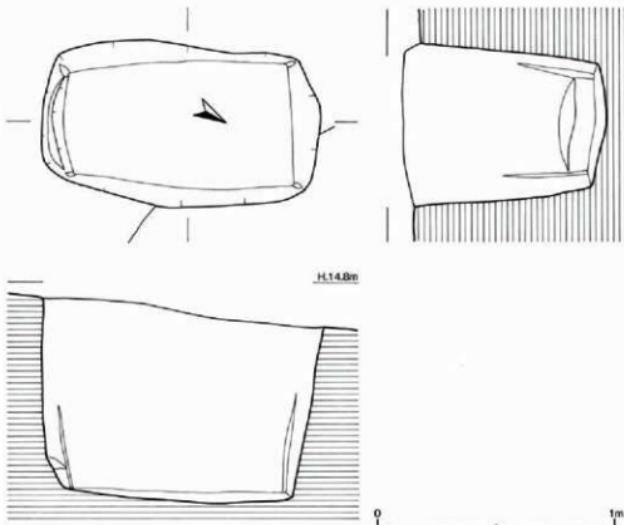


Fig.19 49号土壤実測図 (1/20)

9・10は土師器小皿で、体部はストレートに外反する。口唇部には油煙が付着し、灯明皿に転用か。9は、口径7.4cm、底径5.6cm、器高1.3cmで、糸切り底は上げ底氣味。胎土は微量の砂粒を含む。10は平底で、口径は8.2cm、底径5.2cm、器高1.6cm。11は、糸切り底の土師器皿で、口径10.4cm、底径8cm、器高は2.1cm。胎土は良質で、焼成は良好。暗黃橙色。12は「く」字状口縁の小型の壺で、13と同一個体になろう。



Fig.20 49号土壤 (西より)

6. その他の遺構と包含層出土の遺物

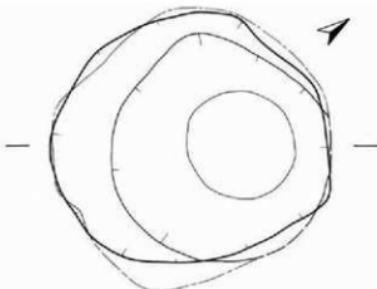
調査では、貯蔵穴や土壙、井戸跡などのほかに大小のピットを検出した。ピットの中には柱痕跡の明瞭な建物跡の柱穴と考えられるものもあるが、ひとつつの遺構としてはまとめ得なかった。

14は、4号ピット出土の波佐見窯の染付磁器皿。口径は13.4cm、器高は4.1cmで高台は直径が4.6cm、高さは8mm。見込に蛇の目の釉剥ぎがあり、呉須で枝折文を描く。体部下半~高台は露胎で豊付

には砂目が付着している。17世紀後半の產。15は、7号ピット出土の碁石で、径が2~2.5cm、厚さは8mmを測る。色調は赤褐色で、石面は磨いて平滑に仕上げている。16・17は9号ピット出土の糸切りの土師器小皿で、体部は内彫気味に立ち上がる。胎土は砂粒と雲母粒を含む。口縁部には油煙が付着し、灯明皿に転用している。16は、口径7.2cm、底径5.2cm、器高は1.1cmで、明褐色。17は、口径6.4cm、底径4.4cm、器高は1.1cmで淡明褐色。18は、17号ピットから出土した肥前有田窯の染付変形鉢。口径は10~11.8cm、器高は5.1cmで、高台は径が4.7cm、高さが6mm。見込には金と紅で縁取りした2羽の千鳥文を描き、その中に松や青海波文を描く。口唇部には窓絵に花文と四方襷文を、外面には唐草文を描く。疊付は釉剥ぎで、18世紀の產。



Fig.22 10号井戸跡（東より）



H14.0m

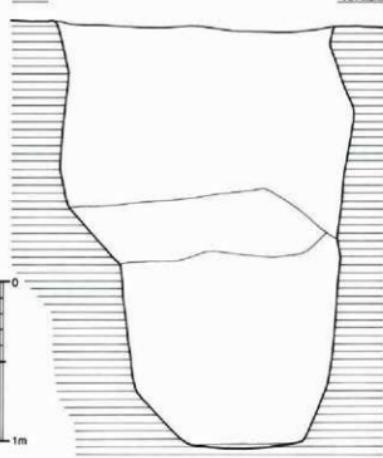


Fig.21 10号井戸跡実測図（1/30）



Fig.23 10号井戸跡下層竹枝出土状況（北より）



Fig.24 10号井戸跡土層断面（南より）

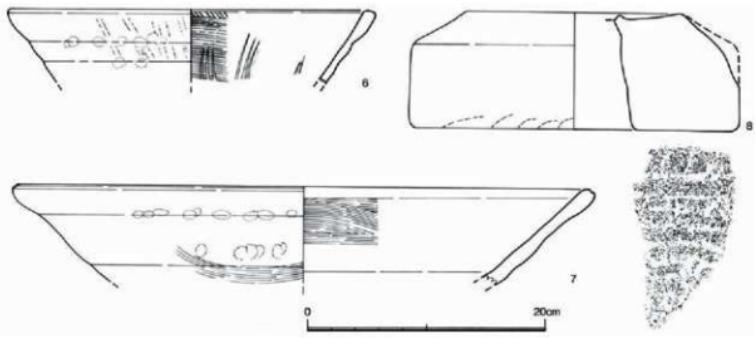


Fig.25 10号井戸跡出土遺物実測図（1/4）

III. おわりに

第12次調査では、弥生時代の貯蔵穴と中世～近世の土壤や井戸跡などを検出した。ここで明らかになった成果を簡単に整理し、後途に託したい。はじめに、弥生時代の遺構は150m南の第5次調査区で検出された中期末の堅穴住居に次ぐ2例目であり、C遺跡内で最も遡るものである。元来、貯蔵穴は単基



Fig.27 1号溝（北より）

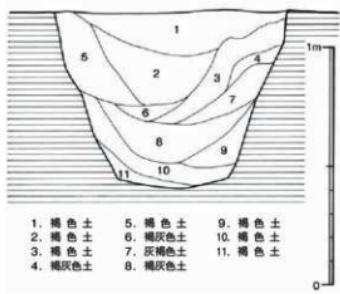


Fig.26 1号溝土層断面実測図（1/20）

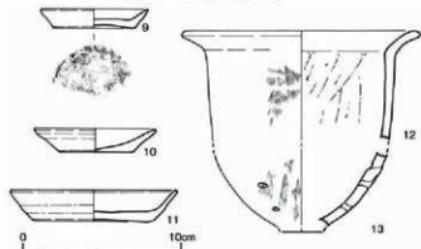


Fig.28 1号溝出土遺物実測図（1/3）



Fig.29
4号ビット遺物出土状況（西より）

Fig.30
9号ビット遺物出土状況（西より）

Fig.31
17号ビット遺物出土状況（東より）

で展開することではなく、幾基かのまとまりをもって分布することが通例である。複数の貯蔵穴が調査区外に拡がっている可能性が想起され、周辺域には主体をなす集落域がある可能性もある。次に、近世の井戸跡や溝の検出は、該期における台地の利用過程を知る資料である。殊に素堀りの井戸は、井筒を埋置する事が一般的な中で珍しい資料と云える。奈良時代の集落域が主体的に拡がる麦野～雜賀隈丘陵において新知見であり、新たな報告例を待つて総合的な検討を加えたい。

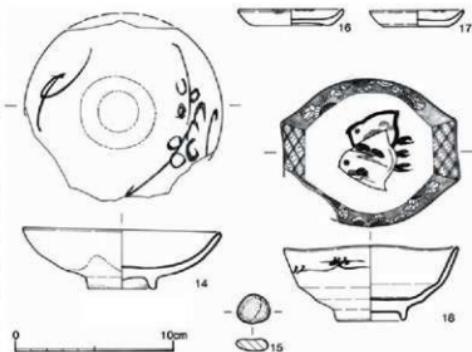


Fig.32 ピット出土遺物実測図 (1/3)



Fig.33 出土遺物 (縮尺不同)

報告書抄録

ふりがな	むぎのCいせき5						
書名	麦野C遺跡5						
副書名	麦野C遺跡第12次調査報告						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第970集						
編著者名	小林義彦						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 TEL 092-711-4667						
発行年月日	2008年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
むぎのCいせき 麦野C遺跡	ふくおかしはかたく 福岡市博多区麦野 6丁目15-3	40130	0050	33° 32° 54°	130° 27° 55°	2007.11.01 ～ 2007.11.20	203.8 共同住宅 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
麦野C遺跡 第12次	集落	弥生時代 中世後半～近世	貯藏穴 井戸跡 土壙 溝遺構	土器、磁器、石製品			

麦野C遺跡5

—麦野C遺跡第12次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第970集

2008年(平成20年) 3月31日発行

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号
電話 092-711-4667

印刷 久野印刷株式会社
〒812-0023 福岡市博多区奈良屋町3-1
電話 092-262-5726